

二〇二二年二月二〇日 《天使の歌は聞こえない》

詩一四三篇七、八節

主よ、早く答えてください／わたしの霊は絶え入りそうです／御顔をわたしに隠さないでください／わたしはさながら墓穴に下る者です／朝にはどうか、聞かせてください、あなたの慈しみについて／あなたにわたしは依り頼みます／行くべき道を教えてください／あなたに、わたしの魂は憧れているのです。

ヨハネ福音書一〇章一～四節

はつきり言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いだ。門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立つて行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。

宗教を信じる人と信じない人の違いは、神の御心に従おうとすることはないかです。ただし信じる人も、神の御心が分かればこそ従うことも出来ます。神の御心は、祈りで聞きます。もっとも、祈っても神の声が聞こえるわけではありません。そのため自分の思い込みを神の御心と信じてしまう危険もあります。

祈りは人間に共通であり、宗教を信じていない人も真摯な尊い祈りを捧げます。ニュース報道などで深刻な状況の気の毒な人のことを聞き知って《心を痛めた時》に、知らない他人のために真摯に祈ります。

ところが自分が困難な立場におちいると、祈りが不純なものになる場合があります。いわゆる「困った時の神頼み」になるからです。

信仰とは神を頼みとすることです。ですから困った時も困っていない時も、神に頼んで生きるのが信仰生活です。ただ、祈りは心（魂）に対して効果があります。可哀想な状況にある赤の他人のために心を痛めた時は、祈りが純粹に心の問題です。だから真摯な祈りになるのです。たとえば自分の病気を心配して祈る時も、心配する「心」のために祈ると良いでしょう。祈りによって魂が癒やされれば、身体も整えられて病状が改善する場合も多いでしょう。ところが自分が困った時には、病氣治癒など物質面での直接の御利益を期待しがちです。それで祈りが乱れ、信仰まで乱れるのです。

それを見た信じない人たちは、信仰者を「困った時の神頼み」と揶揄します。その指摘は正しい面もありますが、信じない人たちは、神が祈りに応えてくださることを知りません。ですからせっかくの他人のための尊い祈りも、虚しいもので終わります。

詩篇の詩人は「主よ、早く答えてください」と神をせかします。「困った時の神頼み」なので祈りが歪んでいるのです。祈っても神は答えてくれないと感じてしまうのは、困った時の私たちの実感です。神は答えてくださらないわけではありません。具体的、物理的、物質的な解決を期待するために神の答えが聞き取れなくなるのです。

神の答えは、天使の妙なる歌声のようなものではありません。「人々は自分に都合の良いことを聞こうと…真理から耳を背け、作り話の

方にそれて行く（Ⅱテモテ四3、4）」とある通り、聞き心地の良い妙なる調べは、たいてい悪魔のささやきです。ですからキリスト教でも他の宗教でも「神の声を聞いた」と吹聴する信者は信用できません。自分に都合の良いことを「神の声」としているからです。

神の声は、罪ある自分にとっては耳障りだと覚悟していた方が良いでしょう。神の声を聞き分ける具体的なコツを、多くの先輩牧師から聞かされてきました。二つの選択肢がある場合「こっちは選びたくない」という方を選べということでした。神の声は、実はもう聞こえているのに自分が耳を塞いでいるということです。

人を殺したが「自首したら家族が困るから自首は選択肢にない」と考えた殺人犯がいたとします。「自首という選択肢はない」と言えるのは、心の中では自首が選択肢の一つになっているからです。選べたくない選択肢を思いついた人は神の声を聞いています。

私も、以前の教会をやめる時に神の声を聞きました。一年間、妻の母国に住むという、私にとっては不都合な選択肢が思い浮かんでいました。言葉は出来ず、仕事もなく貯金もありません。子どももいるので「家族が困る」と、自首を拒む殺人犯の心境でした。しかし「二つの選択肢があれば困難な方を選べ」という牧師たちの言葉や「狭い門から入りなさい（マタイ七13）」というイエスさまの言葉から考えれば、神の御心は渡航することだろうと思い、厭々神に従いました。

その結果、人生が開けた思いがします。色々思いがけない体験ができました。生活面でも助かりましたが、それ以上に信仰面で大きな刺激を受けました。

神は祈りに答えて常に導きを与えてくださいます。ただ人間の声で

はないため違和感があります。それでも私を愛して導いてくれている神の声に聞き従う方が幸せになれるはずです。

神の声が聞こえないように感じても、祈ればすぐに答えはかえって来ています。詩篇の詩人も「あなたに、わたしの魂は憧れているのです（一四三八）」と言っている通り、魂の大元は既にただされ始めているのです。あるいは、祈るよりも前に、先に神の声が聞こえたから祈ろうという気持ちになるのかもしれませんが。他人のために心を痛めた無神論者は神の声が聞こえたから祈りに導かれたのです。

私たちは、常に正しく狭き門を選べるわけではありません。神の声が聞こえないふりをする時も多いでしょう。ただ二つの選択肢で迷う自分に気付いた時は、困難な道を選びたいものです。恵みに満ちた大きな刺激があり、改めて人生が開けます。

困った時に祈ることは大切です。私たちは物質的なこと、具体的なことから祈りを始めます。神は祈りに応えてくださいますが、物質的なお手軽な解決は示されません。近道はありません。近道から来るのは悪魔です。魂の「盗人であり、強盗」です。神は、私たちの魂の大元をただすために、御心を示してくださいさるのです。

私たちは、本当は、その声を聞き分けることが出来ます。肝心な時に、ちゃんと神さまの備えてくださった門をくぐれるように、小さなことでも聞こえないふりをするのはやめた方が良くかもしれません。私たちの魂は、神に憧れているのです。神の声に聞き従って、神に愛されている通りの幸いな人生を歩みましょう。